

木造公営住宅（弟子屈町）の実施例

MOBI 建築・都市研究所 代表 辻谷英樹

■ はじめに

北海道木質構造開発協議会の辻谷と申します。今日は弟子屈町の木造公営住宅の実施例を見ていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

■ 北海道木質構造開発協議会の紹介

北海道木質構造開発協議会は、釧路管内の建築設計事務所 8 社で構成されています。地場産木材を用いた構法や資材の開発とその普及活動などを行っています。

地場産の木材を使った建物を建てる時には、私たち設計事務所だけががんばってもうまくいきません。行政・生産者・林業・製材関係の方々と協同してやっていかなければなりません。これまでに、外部から講師を招いて勉強会を開催する、全国の木造公共建築物を視察するなどの活動をしています。また、今回ご紹介する、弟子屈町の公営住宅のような木構造による公共建築物の提案設計を行っています。

■ 弟子屈町の木造公営住宅建設の背景

弟子屈町では、平成 15 年に住宅マスタープランを作成し、公営住宅を RC 造中低層から木造平屋に転換しました。少子高齢化・人口減少をふまえ、子育て支援・高齢者向け対応・建設コスト圧縮・地元企業の起用を図って木造平屋を採用しました。また、築 40～50 年のブロック造公営住宅の更新時期が来たという背景もあります。

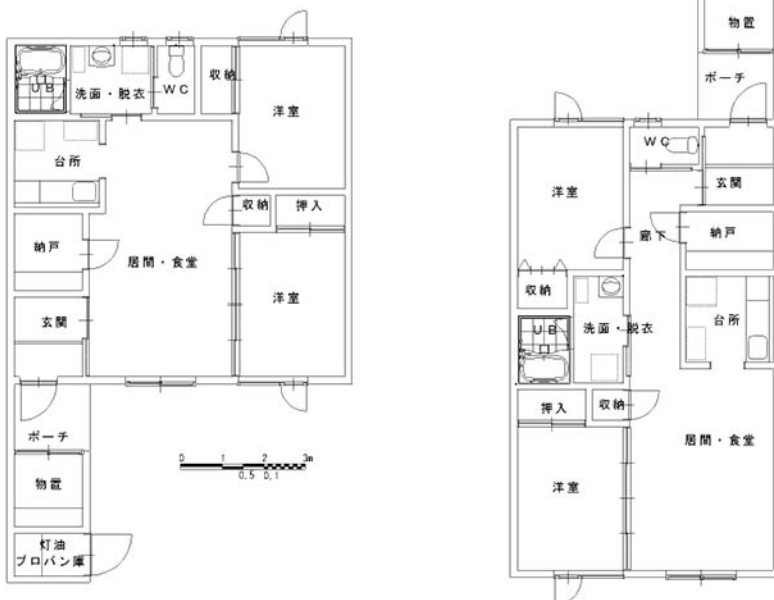
■ 新泉ヶ丘団地の計画

図 1 は新泉ヶ丘団地の平面図です。新泉ヶ丘団地の平面計画上の特徴は、収納を確保する納戸の設置、独立したキッチンの採用です。独立したキッチンは、動線を効率化できる特徴があります。

玄関先には、物置とプロパン戸を配置して屋根がポーチにかかっています。道路から直接見えないところに玄関があることで落ち着いた感じになっています。車社会ですから、一人に一台車があります。離れたところに駐車場があるよりも、玄関先に車を止めたいものです。

この住戸は 6 軒で 1 ユニット（写真 1）ですが、そうすると突き出たところの間がアプローチ兼駐車場になります。こうすることで外構空間を含めて、世帯の占有部分がひとまとめになって除雪などの隣戸間のトラブル防止になります。

ここでは主要な出入り口を引き戸にするなどユニバーサルデザイン的な配慮を



新泉ヶ丘団地 住戸平面図

占有面積： 65.61 m²

占有面積： 68.04 m²

図1 新泉ヶ丘団地の平面図



写真1 新泉ヶ丘団地の外観

行いましたが、あまり徹底できませんでした。例えば、玄関が上がる・折れ曲がる・戸がある・折れ曲がって入るといった形になって車いすでは使いにくい形でした。廊下の幅も余裕をとったつもりでしたが不十分なところがありました。また、ドアがカーペットに引っかかる場合もありました。

■ 居住実態調査

新泉ヶ丘団地の居住実態を調査したところ、納戸の設置が収納家具の削減には必ずしもつながっていませんでした。理由は、公営住宅間の住み替えが大半なので家具をそのまま持ってきたというものです。

独立キッチンの使い勝手は、従来のオープン型キッチンのほうが好評でした。また、木質フロアも特徴でしたが、ほとんどの家はカーペットを敷き込んでいました。調査では、住民の多くがこれまでの居住形態を踏襲していることがわかりました。

■ 敷島団地の計画

新泉ヶ丘団地調査の結果をふまえて敷島団地の計画を行いました。この計画ではユニバーサルデザインの徹底的な導入を行いました。車いすで支障のない開口幅と段差の解消、車いすで使える水回り、介護に必要な部屋の広さの確保を検討しました。

図2が敷島団地の平面図です。ユニバーサルデザインの考え方を取り入れようとすると、水周りの面積が必要になるので全体が大きくなりがちです。ここで

は、全体の面積を大きくしないために納戸などを省きました。台所もオープン型を採用しました。家具の問題は、一つひとつの部屋を大きく取ってその中で配置するという考えをとりました。トイレを完全車いす対応にすると、健常者用としては広すぎるので、トイレのドアを取り外し可能にしました。

居間と洋室1との間は3枚引き戸にし、開けると一体になるような空間作りをしました。

最大の特徴が洋室1と洋室2の間仕切り収納です。これを動かすことで多彩な住み方が可能です。玄関も折れ曲がらずにまっすぐ入れるようにしています。

図3は可動式間仕切りを標準の位置にした場合に、どのような住み方ができるかを想定したものです。左は3枚引き戸を開けて居間と洋室1を一体にした例です。中央は洋室1が4方向から介護可能な広さを持つことを示しています。右は子供部屋を設けた例です。



敷島団地 住戸平面図
占有面積： 64.62 m²

図2 敷島団地の平面図



図3 可動間仕切りを標準の位置で使用する例

図4は可動間仕切りを移動した例です。左は間仕切りを洋室2側に寄せて夫婦の部屋を大きくした例です。中央は間仕切り壁とせずに中央に背中合わせに配置した例です。右は、すみに寄せてしまって大きい空間として使う例です。

このように多彩な居住形態に対応できます。可動式収納は簡単には移動できないので、事前に希望の配置を聞き取って入居前に移動を行っています。

■ 敷島団地の建設

写真2は敷島団地の建設中の写真です。基礎は外断熱でスカート断熱工法を採用しています。居間のスパンが長いところはカラマツの集成材を使っています。この建物は小屋組を極端に省略しているところが特徴

です。梁が母屋を兼ねているような形にして小屋組をできるだけ少なくしています。屋根は平らに近いですから、屋根面と妻面の壁の面積も小さくなります。このようにコストの縮減を図っています。

メンテナンスのことを考えると、外壁に木を使うのは難しいという判断もありましたが、玄関の飛び出し部分にはカラマツの羽目板を使用しました(写真3)。

残念ながら弟子屈町の公営住宅では木製サッシを採用することはできませんでした。理由はコストですから、公的な補助があればこのようなケースでも使えると思います。

(文責：企業支援部 技術支援グループ 鈴木昌樹)



図4 可動間仕切りを移動した例



写真2 建設中の敷島団地



写真3 カラマツ羽目板を利用した玄関周り